

こんにちは
健保組合です！

太陽運輸株式会社の巻 (市原市)



近年の運送業界は、働き方改革から環境対応、テクノロジーの進化まで、現場にも経営にも大きな影響を与える社会変動に適応するため、さまざまなことが求められています。まさに「変革の真ただ中」。

特に大きな変革として挙げられる



▲太陽運輸(株) 本社

のが、ドライバーの残業時間が制限され、物流の輸送力不足が懸念される「物流2024年問題」への対応が本格化していること。さらに、2025年4月に施行された「物流改正法」によって荷主企業にも物流効率化の責任が求められるようになり、物流事業者任せだった従来の体制から、荷主・物流事業者の協働による改善が重視されるようになったことです。これらは単なる業界内の変化にとどまらず、「安全・効率・持続可能性」を軸にした新しい物流の形をつくる社会的な動きです。

ほかにも、燃料価格の高騰や自然災害による道路事情の変化など、依然として課題は山積しています。こうした状況下においても、業界全体で知恵を絞り、持続可能な物流の実現に向けて着実に歩みを進めていくことを、心より願ってやみません。

本社を構える八幡宿は
宿場町として栄えた土地

今回、伺った太陽運輸株式会社(北村方宏社長)の社は、市原市の北部、JR内房線八幡宿駅にほど近い場所にあります。

八幡宿は千葉市に隣接するエリアで、古くは江戸時代に房総往還の宿場町として栄え、旅人や商人が行き交った大きなにぎわいを見せていました。江戸時代以降、八幡港からは「五大力船」と呼ばれる大型帆船が江戸へ物資を運び、海運の拠点としても重要な役割を果たしていました。しかし、昭和30年ごろから京葉工業地帯の一角として埋め立てが進められ、現在では港は姿を消しています。

また、同地域には、「飯香岡八幡宮」があります。上総國の一国一社の八幡宮として白鳳4年(675年)に創建されたもので、今でも安産・子育ての神として人々の信仰を集めています。

ライフラインの維持を担う
タンクローリー事業を専門に

「こんにちは。トラック健保です！」と訪問すると、北村社長に出迎えられ、応接室で取材をさせていただきました。まずは、同社の社史についてうかがいました。

同社が設立されたのは終戦から10年

戦物物の扱い等についての教育はもちろん、注意事項は繰り返し説明しています。「プロとして気構えを持って業務に取り組んでもらいたい」と、社長自ら講師として登壇されます。教える立場として気を付けているのは、「対面が大切」ということ。社員の表情を見て、理解度を確認するそうです。

また、朝点呼の時に従業員に一声かけ、コミュニケーションを図っています。一方、従業員一同そろっての朝礼をかつては行っていたものの、現在では行っていない。「ドライバーの本分は公道を安全に走ること!」、勤務時間中は職を全うしてもらうよう定期講習や朝点呼を行って個々の自覚を促しているため、必要以上に集合をかける必要はないと考えてのことです。実際に従業員の定着率は高く、日々の細やかな社長の気遣いが、働きやすい環境をつくっていることが分かります。

運輸の使命に徹して
社会の信頼に応える

北村社長は、食品の卸しを扱う業種からこの業界に入られたそうです。そのため、タンクローリー車の免許や危険物取扱者免許も、入社してから取得されたとのこと、「経営に関して苦勞が多かった」と振り返ります。

今後の経営戦略をお聞きすると、油の需要、環境問題などさまざまな考える



▲同社のタンクローリー

余りの昭和33年。日本の道路の多くは未舗装で、都市部でも路盤工事が進行中という状況にあって、川崎製鉄千葉製鉄所(現JFEスチール)で生産される道路路盤材の鉄鋼スラグ碎石を運搬するタンブカーの需要に応えるべく設立されました。やがて、市原臨海地区に三井石油(現ENEOS)が製油所を開設、これに合わせて燃料油配送のためタンクローリー事業を開始しました。

グループ会社には、太陽物産(設立昭和29年)と太陽測量(同昭和38年)があります。太陽物産は鉄鋼スラグ碎石等を販売する会社として、太陽測量は京葉臨海工業地帯の造成に伴って測量業務を担う会社として創業されたも

ところはああるものの、まずは、経営理念である「運輸の使命に徹して社会の信頼に応える」をモットーに、特殊車両の強みを生かし、100年企業を目指したいとおっしゃいました。

健康管理についてお聞きすると、1日2箱吸っていたタバコを、好きな銘柄が廃番となったのをきっかけにきっぱりやめたそうです。また、毎日夕飯後、奥様とご一緒に7千歩を目標に歩いているとのこと、当健保組合主催の「健歩ウォーキングキャンペーン」にも最初から参加されています。なお、このキャンペーンに参加した従業員には、参加賞とは別に会社からも金一封を出し、従業員の健康管理にも努められています。今後もぜひ、健康維持増進に健保組合の事業をご活用いただければ幸いです。

同社のロゴマーク(図)は、社名の通り太陽を表していると思われすが、社名の由来、ロゴマークの由来をお聞きすると、「昇る太陽が沈む太陽か」とユーモアを交えながら、「明確には分からない」とお答えいただきました。もちろん、昇る太陽のごとく、太陽運輸のますますの発展を祈念いたします。



▲太陽運輸(株)の
ロゴマーク

北村社長はじめ太陽運輸の皆さま、ご協力ありがとうございました。

会社同士のつながりを重視
協力会で不測の事態に備える

ので、地域の発展とともに事業が拡大していったことが分かります。

平成に入ると、公共事業でもある道路工事が一段落し、鉄鋼スラグ碎石の運搬需要が少なくなったため、同社はライフラインの維持を担うタンクローリー事業を専門とする会社として現在に至っています。



▲本社エントランス

繁忙期である10月から3月にかけては臨時ドライバーを雇用しています。が、高齢化が進んでおり、いざというときの人員不足に不安を抱いているそうです。そのため、65歳定年制を設けている一方で、定年後も就労可能であることが確認できれば再雇用を行い、雇用の継続につなげているということです。

早くから国民生活に欠かせない燃料の配送を行っている同社ですが、コロナ禍の時期には、人やモノの移動が激減したため、バス会社や運送会社への軽油の配送が大幅に減少し、業績に影響が出たとのこと。環境問題から来る化石燃料の消費量の減少とともに、新型コロナウイルス感染症の拡大のような事象が、多方面に影響を及ぼすものだということが改めて実感されます。

市原市は製油所もタンクローリーの会社も多いため、各製油所に入構する会社で協力会があり、横のつながりを大切にして情報共有を行い、不測の事態に備えています。また、同社の車両はカラーリングなしの無印車両で、取引先の多様な要求に対応できるようにしているそうです。

社員教育では対面が大切
[face to face]と良好な環境に

社員教育については、毎月1回、定期的に会議と講習を行っています。危